

サイドイベント 上野勢以子 スピーチ

広島県在住の被爆2世の上野勢以子です。母は12歳の時、爆心地から1キロ地点で被爆しました。

母は、被爆の体験については多くを語りませんでした。しかし、被爆時の様子が胸に焼き付いており、ふとした瞬間によみがえることがありました。電子レンジで鶏肉の温めに失敗し、皮が破裂した様子を見て「これが原爆なんよ！」と叫んだり、被爆の際の様子を絵を描いてと頼むと、「描けん！」とつぶやき、赤、青、黒のクレヨンを持って、何十にも円を描き、「地獄だった。」と言ったりしました。

母は、高血圧や糖尿病を患っていましたが、病院に行きたがりませんでした。症状は悪化し、晩年は、心筋梗塞で何度も倒れ、63歳で亡くなりました。

母は、アメリカ科学アカデミーが1946年に設立したABCC(原爆傷害調査委員会)に呼ばれ、調査を受けていました。この委員会は原爆による傷害の実態を詳細に調査するために作られたものです。母は「調べるだけで、治すことはしてくれない。被爆者はモルモットよ」「医者には信じられん」と医療への不信をつのらせていました。

ABCCの調査は、被爆者から生まれた子への影響の調査も行っています。私も高校生の時に調査を受けるように連絡がありました。「被爆2世死亡率調査」だと後で知りました。「行ったら何をされるかわからん。」と、母は何度も断りましたが、断りきれませんでした。つらそうでした。

8年前、1975年に日米共同出資でABCCに変わって設置された放射線影響研究所から、調査記録の開示を受け、被爆状況を知ることができました。(これが開示資料です)被爆直後、家の下敷きになり這い出し、川を泳いで逃げた事など、12歳の子どもが一人で逃げ惑う姿が書かれていました。調査記録の中には、「外国人医師の治療拒否」や「一人が怖い」などの被爆後の怒りや不安の記述がありました。

健康への不安は、母から私、そして我が子へと続いています。

被爆2世は、世代を超えた核被害の連鎖を感じている世代だと痛感します。放射線影響研究所の被爆2世に対する調査は今も続き、近年はゲノム調査が進められています。

私には、被爆二世だと話すと、「うつらんのか？」と言われた体験があります。唖然としました。原爆や被爆2世に、偏見をもち差別をするという現実があると悲しくなりました。

これは、今もだと思えます。核兵器があるということ、持つということは、誰かが被害にあうのではなく、自分も被害にあうのだと気づいて下さい。核兵器と人類は共存できないと強く思います。ありがとうございました。